対人的脅威が潜在的自尊心の補償的高揚に及ぼす効果[1)]

村　上　史　朗*

The effect of interpersonal threat on implicit self-esteem compensation

Fumio MURAKAMI

要　旨

自己への脅威状況において、潜在的自尊心は低下するのではなく逆に高揚することが示されている（Rudman, Dohn, & Fairchild, 2007）。この効果は潜在的自尊心の補償と呼ばれ、自己防衛過程の一部と位置づけられている。本研究は、Rudmanら（2007）の知見の日本における概念的追試を行うことを目的とした。Rudmanらは主にアイデンティティへの脅威を用いていたが、本研究では対人的脅威として失敗の他者からの可視性を操作した。その結果、対人的脅威高条件で、対人的脅威低条件よりも潜在的自尊心が高く、潜在的自尊心の補償的高揚が確認された。一方、顕在的自尊心については効果が見られなかった。また、本研究の知見が潜在的自尊心の補償的高揚や自己防衛過程に対して持つ意義について考察した。

【キーワード】潜在的自尊心、自己防衛、補償的自己高揚

問　題

自尊心維持動機と補償的高揚

自尊心は、社会心理学の中で一貫して主要なトピックでありつづけてきた。自己への態度や評価は、動機づけや行動選択への影響はもとより、自己を取り巻く社会的事象への態度や評価にも反映され、我々の社会への認識に影響を与えると想定される。社会的比較（Festinger, 1954）、栄光浴（Cialdini, Borden, Thorne, Walker, Freeman, & Slone, 1976）、自己評価維持モデル（Tesser, 1988）、自己肯定理論（Steele, 1988）、自己奉仕的バイアス（Miller & Ross, 1975）など様々なトピックの研究において、自尊心の維持・高揚動機は前提として位置づけられてきた。

しかし、自尊心を高く保つことが望ましいことだとしても、我々は常に自尊心を補強するような望ましい経験だけに囲まれているわけではない。好むと好まざるとに関わらず、我々は自身の自尊心に脅威を与えるような経験に直面せざるを得ない。脅威にさらされた状況で自尊心を維持するための方略は、これまでの研究でいくつか報告されている。例えば、Steele (1988) の自己肯定化理論では、脅威を受けたものとは異なる領域での自己肯定を通じて、全体的な自己への脅威

平成25年 9 月28日受理　*社会学部准教授

を緩衝するという方略を示している。例えば、学業成績が悪いという脅威に直面した場合、試験の成績という客観的な結果を否定することは難しい。しかし、「友人との良好な関係」のような異なる面で自己肯定ができるのであれば、全体的には肯定的な自己像を保つことができる。

本研究では、脅威場面における自己肯定過程のひとつとして、自己への脅威状況における自尊心の補償（compensation）効果について検討する。脅威状況における自尊心の補償とは、自己防衛過程のひとつであり、自己への脅威を感じた場合に自己防衛的にむしろ自尊心が高揚するという効果である。自己の望ましさを毀損する脅威に対し、自尊心は低下するのではなくむしろ高揚すると想定されている。自尊心への脅威に対する自己防衛反応には、他者への攻撃性の増大（e.g., Baumeister, Smart, & Boden,1996）などが報告されているが、その効果について自尊心の補償的高揚が媒介的に作用している可能性が指摘されている（Rudman, Dohn, & Fairchild, 2007）。脅威を受けた場合に自尊心が補償的に高揚し、その結果として内集団バイアス等の自己防衛反応が生じると考えられている。

一方で、脅威を受けた場合に、逆に自尊心が低下することを予測した理論もある。ソシオメーター理論（e.g., Leary & Baumeister, 2000）では、自尊心は社会的関係において自己が受容されている程度を示すと想定されている。その仮定に基づけば、社会的排除などの対人関係の受容に関しダメージを与えるような脅威を受けた場合、自尊心は補償的に高揚するのではなくむしろ低下することによって対人関係における危機的な状況を示し、改善行動を促すと予測される。

潜在的自尊心の補償的高揚

上述の通り、自尊心の補償的高揚については理論的予測が一貫していない。上記の議論は自尊心を自己報告（self-report）によって測定した指標（以下、顕在的自尊心と表記する）に関するものであるが、近年では無自覚な回答を求めることのできる潜在的指標が複数開発されている。自尊心に関する潜在的指標としては、潜在的連合テスト（IAT; implicit association test）（Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998）、ネーム・レター効果（Nuttin, 1985）などがあり、これらの指標で測定された潜在的自尊心は顕在的自尊心との相関が弱く、自尊心の異なる側面を捉えた指標であると考えられている（Bosson, Swann, & Pennebaker, 2000）[2)]。

そして、本研究で扱う潜在的自尊心に関しては、自動的な補償的高揚が生じることが示されている（Jones, Pelham, Mirenberg, & Hetts, 2002; Rudman et al., 2007）。Rudman et al.（2007）は、脅威時に外集団ステレオタイプが活性化する過程として、潜在的自尊心の補償的高揚を媒介変数として位置づけている。具体的には、潜在的自尊心が脅威場面で補償的に高まることを通じて、それと一貫するように、副産物的に外集団への否定的態度が生じると仮定している。実際、Rudman ら (2007) では、白人参加者を対象としたアイデンティティへの脅威が黒人への潜在的バイアスに対して持つ効果が潜在的自尊心の補償的高揚によって媒介されていた（experiment2）。また、脅威場面における潜在的自尊心の補償的高揚は顕在的自尊心と連動しておらず、自動的な過程であることが示唆されている（experiment1）。

本研究の目的は、Rudman et al.（2007）の潜在的自尊心の補償的高揚について概念的追試を行うことである。自尊心の比較文化研究のこれまでの知見からは、顕在的自尊心の水準に文化差が

あること、潜在的自尊心の水準には文化を超えた共通性があることが共に繰り返し示されている(Yamaguchi et al., 2007; Kobayashi & Greenwald, 2003; Kitayama & Uchida, 2003; Kitayama & Karasawa, 1997)。このように自尊心の概念及び位置づけに文化差がある可能性が示されていることから、潜在的自尊心の補償的高揚が日本においても確認されるかは自明ではなく、これを検証することには意義があると考えられる。

本研究のもう一つの目的は、脅威状況の操作として失敗状況の他者からの可視性を取り上げることである。Rudmanらは脅威状況の操作としてアイデンティティへの脅威（性役割アイデンティティなど）を取り上げているが、どのような脅威においても潜在的自尊心の補償的高揚が見られるとは限らない。日本人を対象とした脅威の操作としては失敗状況に関する検討が行われており（村本・山口, 1997； 小林, 2004)、これらの研究では失敗状況において直接的な自己高揚は見られないものの、集団を介した間接的な自己高揚が確認されている。この結果は、文化的に直接的な自己高揚が好ましくないとされる日本人であっても、内集団を介した間接的な自己高揚であれば表明しやすいと解釈されている。これらの研究は顕在的な指標を用いて検討されたものであるが、本研究で扱う潜在的自尊心の補償的高揚は、明示的な表明ではないため顕在的な自己高揚よりは生じやすいと考えられるものの、間接的自己高揚ではなく直接的自己高揚と位置づけられるため予測が難しい。そこで、本研究では失敗のインパクトを強めるため、他者からの可視性の高い失敗状況について検討することとした。具体的には、他者の前で失敗する状況を対人的脅威が高い状況、周囲に人がいない場面で失敗する状況を対人的脅威が低い状況と位置づけ、潜在的自尊心について以下の仮説を立てた。

仮説：対人的脅威が高い状況を想起した場合、対人的脅威が低い状況を想起した場合よりも、潜在的自尊心は高くなるだろう。

顕在的自尊心と補償的高揚の関係

また、顕在的自尊心と補償的高揚の関係について、以下の２点を探索的に検討する。１つは、顕在的自尊心においても補償的自己高揚が見られるかについてである。既に論じた通り、顕在的自尊心について自己防衛的な補償的高揚が見られるかについては異なる理論から逆方向の予測が導かれる。そのため、この点については予測をせず、探索的に検討する。もう１つは、顕在的自尊心の高低によって潜在的自尊心の補償的自己高揚の効果が異なるかについてである。この点についても、過去の研究から相反する予測が導かれる。顕在的自尊心の高い者には、他者への攻撃性などの自己防衛反応が見られやすい（Baumeister, Smart, & Boden, 1986)。このことからは、自己防衛反応の１つである補償的自己高揚は顕在的自尊心が高いほど見られやすいと考えられる。一方、顕在的自尊心の低い者は失敗などの脅威状況への耐性が弱く、脅威へ過敏に反応することで補償的自己高揚が生じやすくなるとも考えられる。そのため、この点についても予測を設定せず、探索的に検討を行う。

方　法

実験参加者

大学生32名（男性15名、女性17名）が実験に参加した。実験は授業時間中に行われ、参加は任意であることが教示された。

対人的脅威の操作

実験参加者をランダムに対人的脅威の高低２条件のいずれかに割り当てた。実験操作として、脅威状況を想起させた。具体的には、最近半年以内の失敗経験（脅威高条件：「人前で失敗したこと」、脅威低条件：「周囲に人がいないところで失敗したこと」）を１つ想起させ、その時の状況を箇条書きで４分以内にできるだけ多く書くように教示した。想起された回答数の平均は4.84個で、条件間で有意差は見られなかった（$t(30)=1.18$, *n.s.*）。

顕在的・潜在的自尊心の指標

顕在的自尊心の指標としてRosenberg（1965）の自尊心尺度を用いた。また、潜在的自尊心の指標としては、紙筆版IATを用いた[3)]。IATのブロック構成はGreenwald, Nosek, & Banaji（2003）に準じた７ブロックとし、一致課題（自己と快概念を同じ側に分類する課題）と不一致課題（自己と不快概念を同じ側に分類する課題）は各２ブロック設けられた。IAT課題のカテゴリラベルはそれぞれ「自分」「他人」「快い」「不快な」とした。各カテゴリの刺激語は5語で構成し、「自分」カテゴリの刺激語は「私は」「私の」「私と」「自分は」「自分の」、「他人」カテゴリの刺激語は「他人は」「他人の」「他人と」「他者」「他者の」、「快い」カテゴリの刺激語は「すばらしい」「あたたかい」「やさしい」「かわいい」「うれしい」、「不快な」カテゴリの刺激語は「みにくい」「きたない」「くさい」「つらい」「いやしい」であった。

IATのカテゴリ判断課題は、Ａ４用紙１ページに１ブロック分の刺激語40語を縦に配置し、刺激語リストの左右にカテゴリラベルを配置して、刺激語の左右のチェックボックスに任意の印（参加者が記入しやすい印で良いと教示した）をマークするという形式で行われた。各ブロックについて、20秒以内で回答した数を回答数とした。紙筆版IATでは単語ごとの回答時間は算出できないため、各ブロックの回答時間である20秒を回答数で除した値を、各ブロックの刺激語への平均回答時間として算出した。

PC版のIATにおけるIAT得点の算出方法としては、D得点（Greenwald et al., 2003）を用いる方式が主流であるが、D得点の算出のためには刺激１つごとの回答時間が測定されていることが前提であるため、紙筆版IATでは用いることができない。そのため、本研究でのIAT得点は「自分」「快い」の組み合わせ課題（２ブロック）の平均反応時間から「自分」「不快な」の組み合わせ課題（２ブロック）の平均反応時間を減算して算出した。また、「自分」「快い」の組み合わせ課題と「自分」「不快な」の組み合わせ課題の順序はカウンターバランスを取った。

操作チェックの指標

操作チェックの指標として、失敗について恥ずかしさと落ちつかなさの２項目に関してそれぞれ７件法（得点範囲は１から７）で測定した。脅威高条件では「人前での失敗」、脅威低条件では「人のいないところでの失敗」について、それぞれ回答を求めた。

手続き

授業終了後に実験実施のアナウンスをし、参加が任意であることを伝えた後、参加を希望しない学生が退出するのを待って実験用質問紙を配布した。脅威条件、IATの順序条件ごとに計4種類の冊子が用意されており、参加者にはランダムにいずれかを配布した。質問紙は4部構成になっており、1冊にまとめられていた。第1部では自尊心尺度への回答を求め、全員の回答が終了したことを確認して、第2部の脅威条件操作の質問紙に回答を求めた。脅威条件操作の質問紙については4分間の回答時間が設けられており、開始と終了の合図は実験者が行った。続いて、第3部として紙筆版自尊心IAT課題を行った。各課題の開始と終了は実験者の合図によって行われ、参加者は同時に回答を進めた。最後に、第4部として再度自尊心尺度への回答を求め、併せて操作チェック項目へも回答を求めた。全ての参加者の回答終了後に、実験目的についてのデブリーフィングを行った。

結　果

操作チェックの確認

まず、操作チェック項目の確認を行った。恥ずかしさと落ちつかなさの相関係数は有意ではなかったため（r =.177, *n.s.*）、両者を個別に分析した。恥ずかしさについては、脅威高条件（M =5.44）の方が、脅威低条件（M =4.50）よりも平均値が高く、t検定の結果両群の差は有意傾向であった（t (30)=1.737, p <.10）。また、落ちつかなさについては、脅威高条件（M =5.38）の方が脅威低条件（M =3.38）よりも平均値が高く、t検定の結果両群の差は有意であった（t (30)=3.275, p <.01）。恥ずかしさについては有意差は認められなかったが有意傾向レベルの差が見られたこと、また、いずれも操作で意図した方向での差が生じていたことから、対人的脅威の操作は機能していたと見なし、以下の分析を行った。

潜在的自尊心の補償的高揚

潜在的自尊心の分析に先立ち、IAT課題全ブロックの平均正答率を算出したところ、0.8を下回っていた参加者が1名いたため、Greenwald, McGhee, & Schwartz（1998） の基準に従って以降の分析から除外した。

続いて、脅威条件ごとのIAT得点の平均値を比較した。脅威高条件（M =422.73）の方が脅威低条件（M =201.33）よりもIAT得点の平均値は高く、t検定の結果両群の差は有意であった（t (29)=2.444, p<.05）。このことから、脅威高条件の方が脅威低条件よりも潜在的自尊心は高く、潜在的自尊心の補償的高揚効果が生じていたと言える。

続いて、操作前に測定された顕在的自尊心得点を平均値で分割し、脅威条件とともに独立変数とし、自尊心IAT得点を従属変数とした2 × 2の分散分析を行った（図1）。その結果、脅威条件の主効果のみが有意であり（F (1,30)=6.57, p <.05）、顕在的自尊心の主効果（F (1,30)=1.92, *n.s.*）、両者の交互作用効果（F (1,30)=0.01, *n.s.*）はいずれも有意ではなかった。

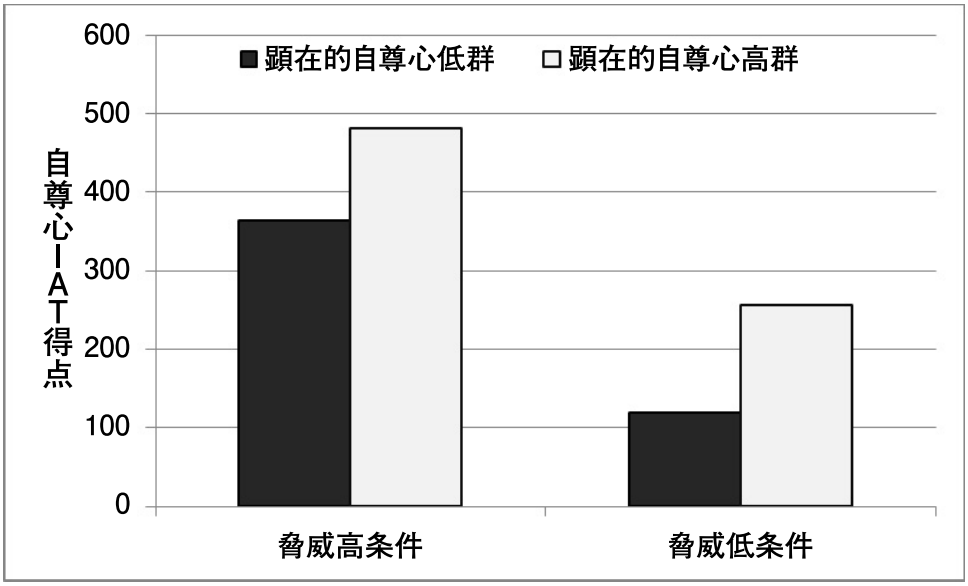

図１　脅威条件、顕在的自尊心の高低ごとの自尊心IAT得点

顕在的自尊心の補償的高揚

操作後に測定した顕在的自尊心得点について、脅威条件ごとの平均値を比較したところ、脅威高条件の平均値（M=32.06）は脅威低条件の平均値（M=31.20）よりもわずかに高かったものの、有意差は見られなかった（t(29)=0.305, *n.s.*）。顕在的自尊心の操作前後の２回の測定値の相関が非常に高かった（r=.949, p<.001）ことと考え合わせると、顕在的自尊心において補償的自己高揚は生じていなかったと言える。

また、潜在的自尊心と顕在的自尊心の相関は、２度測定した顕在的自尊心のいずれに対しても無相関であった（$|rs|$≦.165, *n.s.*）。

考　察

本研究の結果から、対人的な脅威の高い状況で潜在的自尊心の補償的高揚が生じることが確認され、仮説は支持された。このことは、２つの点で研究上の意義があると考えられる。１つは、自尊心の機能において北米とは異なると考えられる日本人サンプルでも潜在的自尊心の補償的高揚効果が確認された点である。脅威を受けて自尊心が高まるという一見逆説的な効果が、潜在的なレベルでは文化を超えてみられる可能性を示唆したという点で、本研究の結果には意義があるだろう。もう１つは、失敗の可視性という脅威状況の操作によっても潜在的自尊心の補償的高揚が見られたことである。これまでの研究では、アイデンティティへの脅威や周囲の他者からの拒絶という脅威を題材にして潜在的自尊心の補償的高揚効果が示されてきたが（Rudman et al., 2007）、本研究の知見から、他者に失敗を知られるという脅威でも潜在的自尊心の補償的高揚が生じることが新たに示された。ただし、この点については今後の研究によって更なる検討が必要でもある。

文化心理学のこれまでの知見からは、日本を含む東アジアでは、周囲の他者との関係性を重視することが示されており（Markus & Kitayama, 1991）、本研究で用いた失敗の可視性の操作は、日本人に対して特に効果を持っていた可能性が否定できないからである。Markus & Kitayama (1991) の文化的自己観理論からは、日本人は相互依存的自己観(interdependent self-construal)が相互独立的自己観(independent self-construal)よりも優勢であるとされ、他者と独立した自己よりも関係的な自己が重視されると位置づけられている。そのため、相互独立的自己観が比較的優勢であるとされる北米等で追試を行うことによって、失敗の可視性の効果の通文化性を確認する必要があるだろう。

顕在的自尊心については、２つの点から探索的検討を行ったが、その効果はいずれも見られなかった。まず、顕在的自尊心の補償的高揚効果が見られなかった点についてであるが、このことは本研究の知見のみから結論を出すことができない。本研究ではRosenberg （1965） の自尊心尺度を顕在的自尊心の指標としていたが、この尺度は本来特性自尊心を測定する指標であり、その時々の自尊心の状態である状態自尊心とは異なる概念を測定する指標である。本研究では、操作前後の指標を一貫させるために操作後にも特性自尊心の測定を行ったが、状態自尊心の指標を測定して顕在的自尊心の補償的高揚が生じるかを確認する後続研究が必要であろう。

ただし、状態自尊心の尺度としては、Heatherton & Polivy （1991） の尺度がよく用いられるが、これと対比可能な形で用いることのできる日本語版の状態自尊心尺度は現時点で開発されていない。日本語版の状態自尊心尺度としては、阿部・今野 （2007） や塩田 （2003） によって開発されたものがあるが、これらはHeatherton & Polivy （1991） との対応を重視したものではなく、それと異なる独自の指標として開発されたものである。また、Heatherton & Polivy （1991） の邦訳版として、舘・宇野 （2000） があるが、これも北米とは異なる日本独自の状態自尊心尺度を開発する予備研究として位置づけられており、文化間比較にはあまり注意が払われておらず、翻訳の等価性を確保する手段が取られていない。もちろん、日本独自の状態自尊心を測定する試みには学術的意義があるが、本研究で問題とする自尊心の補償的高揚効果を検討するためには、先行研究と同じ指標での検討による比較が不可欠である。そのため、Heatherton & Polivy （1991） と等価性を確保した日本語版の状態自尊心尺度を開発し、それを用いて顕在的自尊心の補償的高揚効果を再検討することが今後の研究で求められる。

また、事前の顕在的自尊心の高低は、潜在的自尊心の補償的高揚に対する対人的脅威との交互作用が見られなかった。このことは、少なくとも日本人サンプルにおいては、顕在的自尊心の高低によって潜在的自尊心の補償的高揚を媒介した自己防衛反応が異ならない可能性を示唆している。ただし、このことから、顕在的自尊心が自己防衛反応と無関係であるとは結論づけられない。Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll （2003） は、顕在的自尊心が高く潜在的自尊心が低い人々を防衛的高自尊心者と位置づけ、内集団ひいき等の自己防衛反応を行いやすいことを示しており、顕在的自尊心の水準が自己防衛反応に一定の役割を果たすことがわかっている。また、Jordan et al. （2003） の結果は日本においても概念的追試を通じて同様の結果が得られており（原島・小口, 2007）、日本人サンプルでは過程が異なるとも考えづらい。これらの先行研究と本研究の結果を考え合わせると、自尊心と関連する自己防衛反応には潜在的自尊心の補償的高

揚を媒介する効果と媒介しない効果の２種類があると推測できる。ただし、本研究では操作前の潜在的自尊心を測定しておらず、内集団ひいき等の直接的な自己防衛反応も検討していないため、この点について検証することができない。自己防衛過程のタイプについて、今後の研究でさらに精緻な検討が必要である。

また、どのようなタイプの脅威で潜在的自尊心の補償的高揚が生じるのかを特定することも今後の研究における課題である。Rudman et al.（2007）や本研究の結果から、いくつかのタイプの脅威で潜在的自尊心の補償的高揚が生じることが確認されているが、補償的高揚が見られていない研究も存在する。日本人サンプルを対象に、存在脅威管理理論（terror management theory: Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997）で用いられる死の顕現性（mortality salience）の操作後に潜在的自尊心を測定した場合、死の顕現性の高低によって潜在的自尊心の水準は異ならず、補償的高揚効果は見られなかった（Murakami & Yamaguchi, 2005）。存在脅威管理理論において死の脅威は存在論的脅威（ontological terror）と位置づけられ、極めて大きな脅威である。このような脅威で潜在的自尊心の補償的高揚効果が見られなかったことは、単に脅威の大きさが影響しているのではないことを示唆している。今後の研究において、脅威のどのような要素が潜在的自尊心の補償的高揚を引き起こすのかについて検討が必要であろう。

注

１）本研究はJSPS科学研究費（若手研究B）（課題番号21730491,研究代表者：村上史朗）の助成を受けて実施された。

２）潜在的自尊心と顕在的自尊心の違いについて、Jordan et al.（2003）は、Wilson, Lindsey, & Schooler（2000）の二重態度モデルを援用した説明を行っている。

３）紙筆版IATの妥当性を検証したものとして、岡部・木島・佐藤・山下・丹羽（2004）がある。岡部らによれば、PC版IATと紙筆版IATは高い相関を示しており、精度はPC版に劣るものの紙筆版IATも指標として用いることが可能とされている。

引用文献

阿部美帆・今野裕之 (2007). 状態自尊感情尺度の開発 パーソナリティ研究, **16**, 36-46.

Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). The relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology,* **64**, 141-156.

Bosson, J. K., Swann, W. B., & Pennebaker, J. W. (2000). Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and elephant revisited? *Journal of Personality* and *Social Psychology,* **79**, 631-643.

Cialdini, R. B., Borden, R. J., Thorne, A., Walker, M. R., Freeman, S., & Slone, L. R. (1976). Basking in reflected glory: Three (football) field studies. *Journal of Personality and Social Psychology,* **34**, 366-375.

Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations,* **7**, 117-140.

Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, Y. (1997). Terror management theory of self-esteem and cultural worldviews: Empirical assessments and conceptual refinements. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology,* Vol.29 (pp.61-139). New York: Academic Press.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology* , **37**, 147-169.

Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology,* **85**, 197-216.

原島雅之・小口孝司 （2007）. 顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果　実験社会心理学研究, **47**, 69-77.

Heatherton, T. F., & Polivy, J. (1991). Development and validation of a scale for measuring state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology,* **60**, 895-910.

Jones, J. T., Pelham, B. W., Mirenberg, M. C., & Hetts, J. J. (2002). Name letter preferences are not merely mere exposure: Implicit egotism as self-regulation. *Journal* of *Experimental Social Psychology,* **38**, 170-177.

Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology,* **85**, 969-978.

Kitayama, S., & Karasawa, M. (1997). Implicit self-esteem in Japan: Name letters and Birthday numbers. *Personality and Social Psychology Bulletin,* **23**, 736-742.

Kitayama, S. & Uchida, Y. (2003). Explicit self-criticism and implicit self-regard: Evaluating self and friend in two cultures. *Journal of Experimental Social Psychology,* **39**, 476-482.

小林知博 （2004）. 成功・失敗後の直接・間接的自己高揚傾向　社会心理学研究, 20, 68-79.

Kobayashi, C., & Greenwald, A. G. (2003). Implicit-explicit differences in self- enhancement for Americans and Japanese. *Journal of Cross-Cultural Psychology,* **34**, 522-541.

Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The Nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology,* Vol.32 (pp1.-62). New York: Academic Press.

Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review,* **98**, 224-253.

Miller, D. T., & Ross, M. (1975). Self-serving biases in the attribution of causality: Fact or fiction? *Psychological Bulletin,* **82**, 213-225.

Murakami, F., & Yamaguchi, S. (2005). The effect of mortality salience on implicit self-esteem. Paper presented at the 6th meeting of Asian Association of Social Psychology. Wellington, New Zealand.

村本由紀子・山口勧 （1997）. もうひとつのself-serving bias： 日本人の帰属における自己卑下・集団奉仕傾向の共存とその意味について　実験社会心理学研究, **37**, 65-75.

Nuttin, J. M. (1985). Narcissism beyond Gestalt and awareness: The name letter effect. *European Journal of Social Psychology,* **15**, 353-361.

岡部康成・木島恒一・佐藤徳・山下雅子・丹治哲雄 （2004）. 紙筆版潜在連合テストの妥当性の検討―：大学生の超能力信奉傾向を題材として　人間科学研究（文教大学人間科学部）, **26**, 145-151.

Rosenbarg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image.* Prinston, NJ: Prinston University Press.

塩田公 （2003）. 状態自尊心尺度の作成　日本社会心理学会第44回発表論文集, 738-739.

Steele, C. M. (1988). The psychology of self-affirmation: Sustaining the integrity of the self. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* , Vol.21(pp. 261-302). New York: Academic Press.

舘由紀子・宇野善康 （2000）. 日本版状態セルフ・エスティーム尺度の検討　日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 206-207.

Tesser, A. (1988). Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology,* Vol. 21. New York: Academic Press.

Wilson, T. D., Lindsey, S., & Schooler, T. (2000). A model of dual attitudes. *Psychological Review,* **107**, 101-126.
Yamaguchi, S., Greenwald, A. G., Banaji, M., Murakami, F., Chen, D., Shiomura, K., Kobayashi, C., Cai, H., & Krendl, A. (2007). Apparent universality of implicit self-esteem. *Psychological Science,* **18**, 498-500.

Summary

Previous studies indicated that implicit self-esteem is not decreased, but enhanced, in response to threats involving self-worth (Rudman, Dohn, & Fairchild, 2007). Such "implicit self-esteem compensation" is considered as a part of self-defensive processes. The purpose of the present study is to conceptually replicate the results of Rudman et al. (2007) in Japan. Compared with threats involving identity used as the threat manipulation in Rudman et al. (2007), interpersonal threat was used as the threat manipulation in the present study. Results indicated that, under the condition in which people recalled the failure in public situation, they showed high score on implicit self-esteem, compared with the failure in private situation. There was no comparable effect on explicit self-esteem. The implications of these findings for implicit self-esteem compensation and self-defensive processes are discussed.

【Key words】 implicit self-esteem, psycholgical self defense, self-esteem compensation